

### 直江屋主人曰く

情況とか狀況論ということがいわれられていたのはついでこの間だったような気がするが、いつのまにかそのようなこととは影を潜め、近頃ではいろいろのことが相対化されているようで、それに伴って現実といものが宙に浮き、その意味あいも下落しているらしい。いつそこのような現実を指して狀況の現実と呼ぶのも一興かもしれぬ。なぜなら、この現実とは、すぐ影を潜めるような状況性であるらしいからだ。

その狀況の現実の中で、情報という問題は最もホットなものといわれる。そういえば、この十数年来のソ連情報に關する工作の成功は瞠目すべきものである。またそのような伏線に沿って、大韓航空機事件、アキノ暗殺、ラングリン事件などを眺めると、このアジアでの生々しい動きがはたしてロスアンゼルス・オリンピックに繋がるものかどうかは知らねど、なにやら筋の通ったシナリオが浮かぶのは当方のうがちすぎか。

ところでそのオリンピック、高邁なスポーツ精神、世界平和などというのは赤兎の寝言にしても、現代世界のチャンプであるアメリカがその総力を集めたにしてはなんともチャチで子供騙しの感否めない。成金趣味は致しかたないが、飛行船、人間ジェット、聖火ランナーの茶番劇、点火の際のくだらぬ仕掛、大統領の大根役者ぶり……、開会式を見てさえ、どこに今世紀最大の国家の力と知性があるというのか。このところ過激になつてきている謀略の仕掛人たちの粗雑なプランと同じで、底の割れるような浅薄さである。

その様子が衛星中継で日本に同時に伝えられるのだが、TVの箱の中だけの熱狂というわけで妙に白々しい。TVから伝わるものは感動やら興奮を強制するのだが、そんな手に簡単に乗るものではない。近頃流行っている演出技法に、この強制、つまり無理矢理にプームを捲くというものがあり、これが成功しているといつてはまた強制する。もちろん流行などというものばかりでなく、政策的見地から意図的に優先させられる情報というものもあるのだが、TVの箱の中の存在はそのような情報と交接しているがゆえに、いつのまにか世界の中心が箱の中にあると本気で錯覚しているらしいのも愛嬌というものだ。

もともと文化というものが現象といわれる形で切り取られるとき、そのような性質を發揮するようだが、このところの文化の狀況の現実でさえ情報の力といわれるものに支えられているように思われる。いわゆるマスメディアである。一方の極には発行部数数百万部の全国紙を頂点とする活字メディアがある。一新聞で数百万部とは大きな威力を持つかに見えるが、読者対象人口を仮に五千万とすると、数百万部とは全体の十分の一、つまり十人のうちの一人に対する一方的な情報伝達で、その情報が納得して受け容れられる確率などはお話にならぬくらい低いものであり新聞という存在が思っているほどの力など、言うほどないと思わねばならない。文化のリーダーシップなどというは恥ずかしい話である。そればかりか、新聞など目の前を通過するインクのにしみにすぎない。ましてそれ以下の出版文化、とくに現代的（つまり、より区切られた時間内の、より狀況的な現実という時間内に適合した）とされていく狀況的文化などは蚊の鳴く声にもなりはしない。

また、もう一方にはエンタテインメントを軸にしたTVなどの電波メディアがある。エンタテインメントとはた

\*連載詩集「空中の書」は前号で終りました。ご愛読ありがとうございました。

\*本号は水津燧（みなず・ひとる）の作品を中心にデザインしました。いかがでしょうか。

\*このところ、寄稿・投稿などがグンと増えております。様々の分野で活躍する諸兄の積極的な参画は大いに歓迎するところです。

\*改めて次号の予約を募りますが、毎号部数が増えているのですが、そろそろ限界と思われまます。五号は来春発行の予定ですが、小誌の円滑な継続を図るためご協力下さい。

だの商売である。文化の形は商売になると見定められた文化らしき存在が、状況的現実を作っていると思い込んでいたが、これも根も葉もない不毛の現象である。TVなど、壁の片隅のただのしみである。スイッチを切れば消えてなくなるしみに、何の力があるというのか。かてて加えて、近年開発急のニューメディアは、たしかに現在のエンタテインメント中心の状況的文化的のありようを根本から変えてしまふのかもしれない。だが、ハード面の研究に比して、ニューメディアによる情報自体を使用者がどう選択し、どう吟味し、いかに活用するかというソフト面が欠落していることも事実である。そしてそれもまた状況的現実というもののお粗末さの表れでもある。けれど、そのようなことは瓊まなごだ。

つまり、情報の量が膨大になり多様化しているということ自体すら、ただの状況的現実 錯覚された現実すぎぬからである。それゆえ、それを吟味選択し、自らの味方に仕立て上げ、有効に活用しようなどは本末転倒なのである。ハードウェアが先行しているという事は、いかな情報といえども管理と制御の洗礼を受けねばならぬという事である。そしてこの情報交通の基本構造がハードウェアの設計思想として決定づけられているのだから、裸の情報などその性格からおよそありえぬわけだ。

だが、たとえばINSなどの際に郵政官僚の情報掌握の魂胆が見え透き、さらにその奥に階級的意図や帝国主義の意志の貫徹などを指摘したところでもあまりに当然すぎて面白くない。ただ、情報という現代社会(状況的現実)の最尖端の問題といわれるものにして、その裏にあるものが露骨にすぎ、露骨であるがゆえに逆に現代社会というものの程度の低さを知らしめることになる。

ここで文化ということに話を戻すと、たとえホームオートメーションが完成し、ニューメディアによって包囲され、新たな文化的関係を強制されようと、すでに人間は存在するものをただ存在しているとは見ないのであるから、また情報にどのような意図や操作性が装置されているように、肉に触れうる直接性以外はじかに、あるいはその意図どおり正しく把握するつもりなどないのであるから、ただ単に一つの妄想の中で消化することである人間は人間である。つまり人間は肉でしかないわけであり、その意味では人間の生活に大きな変動を期待するなどは愚の骨頂である。文化とはもともと大きく深いうねりから突出するもので、目先のつまらぬ選択やパリエーションの自動化から生み出される泡沫現象とは関係がない。そして、そのようなことをわきままえないで流布されるくだらぬ心理実験など人間の尻尾だ。

メディアの器は自らを特殊世界化するが、傍目にはその周りの空間につきものの微小な激みでしかない。いかに高度な情報性を有するが、その存在が喚びきたてようが、メディアはただの存在のしみである。我々は退屈しにぎに壁面のしみから様々の事柄を妄想するが、メディアというしみにしたところで、そのような何でもない作業のうちにも他のものと区別もなく呑み込まれてしまうのである。

それゆえ我々のなまじることといえ、状況的現実がチャンネルを切り換えるようにくるくる変動しようと、惑わされることも振り回されることもなく、飽きたらいつでもスイッチをOFFにして、ただただ自らの裸の思考のうち、妄想すべき世界の根をしっかりとつかまえて作業するというだけである。

左の二点をご希望の方にお願ひいたします。在庫僅少のため、申込順に発送いたします。

\*「地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか(略称フネ)」創刊号/魔刊号全三号揃(昭和五十年九月)昭和五十一年四月刊 頒価各五百円

執筆著者 天沢退二郎/入沢康夫/金石稔/山口哲夫/帷子耀/青木はるみ/他  
今回頒価 三号揃 千五百円



\*紙田彰第一詩集「浣腸遊び」

Enema Game (昭和四十九年十月刊、定価千三百円)

今回頒価 千三百円



緑字生ズ 第四号\*昭和五十九年十二月十二日発行\*定価 千五百円\*編集発行人 紙田 彰\*発行所 東京都江戸川区西葛西五一八一七一九〇六 直江屋\*振替 東京一四四〇一五七\*電話 〇三二六八六五九一五\*印刷所 共信印刷

(二点とも、送料は当方負担)